

京都大学大学院
人間・環境学研究科

2019

Graduate School
of
Human and Environmental Studies

研究科長挨拶



研究科は設立当初、医学部北西にあった旧生理学教室（1902年竣工）に設置された。当時掲げられた看板は、西島安則総長（研究科事務取扱＜平成3年4月～9月＞）の書によるもの



人間・環境学研究科 研究科長
総合人間学部 学部長
杉山 雅人

舎密局、洋学校そして第三高等学校の歴史を背景にもつ京都大学教養部の廃止に伴い、その教員組織を母体にして、1991年に大学院人間・環境学研究科が、1992年に京都大学の第10番目の学部として総合人間学部が設置されました。人間・環境学研究科と総合人間学部は、以来、互いに連携をとりながら学部と大学院の教育・研究を進めてきました。そして両部局は2003年に一体化され、人間・環境学研究科は総合人間学部に基づき大学院となり、総合人間学部の殆んど全ての教員は人間・環境学研究科の教員として学部と大学院双方の教育・研究に携わっています。さらに、学内外から協力教員・客員教員を迎え、多様で重厚な学問の場を形成してきました。このような歴史をたどりながら、人間・環境学研究科と総合人間学部は、創立以来、現在に至るまで四半世紀を超える時を数えてきました。

この30年近くは文字通り激動の時代であり、地球規模で、誰もが予想しえなかった出来事が相次ぎました。人間・環境学研究科が設置された1991年にはソビエト連邦が解体し、冷戦時代は終わりを告げました。その10年後の2001年には、ニューヨークの世界貿易センタービルが爆破、崩壊させられ、この事件をきっかけにアフガニスタン、イラクでは戦争状態が勃発しました。その余波は現在まで続いています。更にその10年後の2011年、日本では東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故が発生しました。この災害・事故の影響は今なお計り知れないところがあります。このようないくつもの世界的な事件と並走するかたちで、インターネットの普及を中心とする情報環境の劇的な変化がありました。この30年近くの間にはコンピューターは私たちの生活を一変させてしまいました。

大学院人間・環境学研究科と総合人間学部の歴史は、この激動の時代の歴史と重なります。地球温暖化問題、エネルギー問題、民族間問題といった前世紀以来の諸問題に加えて、これまでとは質を異にする地域紛争が人類に新たな課題を突きつけている、まさにその時代に、この二つの教育研究組織は自らの歴史を刻んできたわけです。こうした難問山積の時代は、学術の存在意義が根底から問われている時代にほかなりません。人間・環境学研究科と総合人間学部は、学術の意義を真摯に問い直すことを通して、この時代の要請に回答しようとしてきました。

「学術を社会に開く」ことがその回答の具体的内容です。課題山積の社会に向かって学術の成果を発信し、その成果を社会で共有する。そのことを通して問題解決にできうる限りの貢献をなす。これらの実現に向けて、文系から理系にわたる諸学問分野が日々努力を続けています。人間・環境学研究科で学ぶ大学院生には、それぞれの専門分野での先端的・独創的な学術成果が求められ、総合人間学部で学ぶ学生にも専門分野での基盤となる学識の修得と新たな展開が求められます。しかし同時に人間・環境学研究科と総合人間学部の学生には、「学術を社会に開く、発信する」という意思を持って、その学問上の成果を初修者や非専門家、市民に対し、説得的かつ魅力的に語ることが求められます。「研究を語る」という教育課題です。このことによって人間・環境学研究科と総合人間学部においては、専門分野の世界に身を置きつつもその専門の垣根を越えていくという精神が醸成されていくこととなります。

目次

研究科長挨拶

教育研究上の目的と方針	1
組織の推移	2
沿革	2
連携・協力関係	2
教員構成表	3
学際教育研究部	4
共生人間学専攻	6
共生文明学専攻	8
相関環境学専攻	10
入学者・修了者の推移	12
定期刊行物・定例行事	14
国際交流	16

教育研究上の目的と方針

研究教育上の目的

(京都大学通則第 35 条の 2 の規定による)

人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の連携を通じて、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、人間と環境のよりよい関係を構築するための新たな文明観、自然観の創出に役立つ学術研究を推進することを目指す。また、こうした研究活動を推進するなかで、人間及び環境の問題に対して広い視野、高度な知識、鋭い先見性をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することを目的とする。

- 共生人間学専攻 共生人間学専攻では、「人間相互の共生」という視点に立ち、人間と環境の相関関係において人間の根源を探究しつつ、現代社会の具体的諸課題に取り組み、社会的要請に柔軟に応えられる研究者、指導者、実務者の養成を目指す。
- 共生文明学専攻 共生文明学専攻では、共生・融和の可能性を追求するため、多様な文明の間にみられる対立・相克の構造を解明するとともに、歴史・社会・文化の諸相にわたって複雑にからみあう文明の諸問題に新たな見地から取り組み、解決の方向性を示すことのできる研究者、指導者、実務者の養成を目指す。
- 相関環境学専攻 相関環境学専攻では、人間と自然環境の関わりを包括的に理解することを目指した基礎研究を展開するとともに、自然と人間の調和を図るために必要な新しい社会システムの確立に、高度な見識と科学的・論理的判断力をもって貢献することのできる研究者、指導者、実務者の養成を目指す。

ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）

人間・環境学研究科は、環境、自然、人間、文明、文化を対象とする幅広い学問分野の連携を通じて、人間と環境のあり方についての根源的な理解を深めるとともに、こうした研究活動を推進するなかで、人間及び環境の問題に対して広い視野と高度な知識、高い倫理性と強い責任感をもって取り組むことのできる研究者、指導者、実務者を養成することをめざしています。

修士課程においては、必修である研究指導科目、選択必修である自専攻開設科目、さらに選択科目である他専攻開設科目を履修して所定の単位を修得し、かつ本研究科が行う学位論文の審査に合格した者に、修士（人間・環境学）の学位を授与します。学位認定にあつては、以下のことが求められます。

1. それぞれの専門領域における広範かつ深い学識や広い視野に基づく研究能力を身につけていること。
2. それらに基づく高度な分析・判断能力や論理的な論述能力を修得していること。
3. 上記のことを通じて、高度な専門性を必要とする職業を担うための優れた能力を培っていること。

博士後期課程においては、特別研究、特別演習、特別セミナーを履修して所定の単位を修得し、かつ本研究科が行う学位論文の審査に合格した者に、博士（人間・環境学）の学位を授与します。学位認定にあつては、以下のことが求められます。

1. それぞれの専門領域における高度な学識や学際的な幅広い視野に基づく研究能力を身につけていること。
2. 「着想の独創性」、「問題解決の企画力」、「持続的努力」などの観点からめざましい学問的成果を上げていること。
3. 上記のことを通じて、新たな知的価値の創出に寄与できる研究職や高度な専門業務に従事するための優れた能力を培っていること。

カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）

人間・環境学研究科は、社会に湧き起こる新たな問題群の解決には従来の思考枠では対処することができないという基本認識に立ち、新しいパラダイムを創出するという目的意識の下に、共生人間学、共生文明学、相関環境学の 3 専攻を置いています。同一専攻に近接分野を多く配置することによって専門性に重点を置き、専門を掘り下げてその裾野を広げ、裾野を広げることによって頂上を高くすることをめざしています。

ディプロマ・ポリシーに示された目標を達成するために、多様な専門分野の科目を体系的に編成するとともに、分野横断的・専攻横断的な科目を設定しています。学生の自主性を尊重した教育を実施し、学生が倫理と責任について十分な意識をもつよう、教員と学生の対話を重視しています。

修士課程では専門分野における研究能力と高度な専門性を修得するために、学生は研究指導科目を中心として、講義・演習・実習からなる自専攻開設科目を履修しますが、研究の視野を拡大するために他専攻あるいは他研究科の開設する科目の履修も推奨されます。指導体制については、主指導教員と副指導教員による複数指導体制を採り、狭い専門の殻に自閉しないよう配慮しています。

学位論文の作成とともに、自立して研究を推進する能力や高度な専門業務を行う能力を修得することを目的とする博士後期課程では、学生は指導教員との密接な対話の下に研究を深化させます。また主指導教員と副指導教員を配置した複数指導体制を採り、複眼的思考の強化育成と基盤となる学識の形成を図っています。

修士課程と博士後期課程を通覧できるカリキュラム・マップにより、教育と学修の構造や体系が把握できるようにしています。各科目の内容の詳細や学修成果の評価方法についてはシラバスに明示されています。

アドミッション・ポリシー（入学者受入れの方針）

現代の科学・技術は、人間の可能性を限りなく押し広げてきた反面、地球環境問題、エネルギー問題、地域紛争、富の地域間格差等の諸問題を次第に顕在化させ、グローバル化の波とあいまって、わたしたちに新たな課題をつきつけています。人間・環境学研究科は、こうした新たな問題群に立ち向かい、地球規模での危機的状況を打開・克服するために、これまでの知の蓄積を踏まえつつ、新たな知のパラダイムを構築し、高い倫理性と強い責任感をもって社会の発展に貢献することのできる人を求めています。

人間・環境学研究科への入学を希望する人に求めるものは、下記に示す資質・能力です。

1. 特定の学問分野を主軸とする専門的研究において、問題の設定からその解決方法の提示に至る研究過程に取り組むことのできる知識、能力ならびに熱意を有していること。
2. 他者や異文化に対する理解を尽くした上で、自らの見解を形成し、それを豊かに表現するプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力、ならびにリーダーシップを持っていること。
3. 人文科学・社会科学・自然科学を横断する幅広い知識と教養を身につけ、自らの専門分野のみに閉じこもらない、人間・文明・自然に対する、多角的な視点や柔軟な発想力を培っていること。
4. 「人間・環境学研究科」の名称にある「・」は、加算的な意味合いの「・」ではなく、乗算的な意味合いのそれである。この名称が示唆するように、既成の知を熟知しているだけでなく、それを基盤に新たな創造的飛躍をなす知の軽やかさを身につけていること。

人間・環境学研究科の入学者選抜においては、上記の資質・能力を多角的に測るため、専門分野についての筆答試験、外国語の筆答試験または外部試験、および口述試験または論文試験を柔軟に組み合わせて評価を行います。

組織の推移

大学院人間・環境学研究科は、教養部改革及び大学院改革構想の一環として、京都大学における、最初の学部を持たない単一専攻の独立研究科として、平成3年4月に創設されました。その後、平成4年に「文化・地域環境学専攻」、平成9年には「環境相関研究専攻」が設置されました。本研究科における研究・教育の主題は、人間と環境との様々な関わりを明らかにするとともに、その望ましい関わり方を実現し得る新しい科学・技術と人間のあり方の、原理的な研究を遂行することにあります。

一方、総合人間学部は、平成4年10月1日に法令上設置され、平成5年4月に第1期生を迎え入れた京都大学でもっとも新しい第10番目の学部です。新学部を「総合人間学部」と名づけた理由は、本学部の研究・教育が、各専門分野に限定された個別的研究・教育を超え、自然と調和した人間の全体的形成を目標とするものだからです。

大学院人間・環境学研究科も総合人間学部も、ともに教養部を母体として設立された部局です。

独立研究科であった大学院人間・環境学研究科には、設立当初から総合人間学部の多数の教授または助教授が専任教員として協力講座に参加して、大学院教育に直接携わってきました。両部局の設立以来、10年にわたって築いた密接な連携と協力関係をふまえ、平成15年4月より、両部局は一体化し、本研究科は総合人間学部に基づき大学院となりました。これに伴い、従来の3専攻25研究領域を再編し、3専攻14講座制に改め、同時に総合人間学部の5学系（人間科学系、認知情報学系、国際文明学系、文化環境学系、自然科学系）との学問的教育的整合を図っています。この組織改編により、研究科の教育研究理念及び総合人間学部の教育理念をより内実のある形で実現することを目指します。

本研究科は、人文、社会、自然科学の広範な学問領域をカバーしているところに大きな特色があり、その特色を生かし、従来の諸学問を新しいパラダイムのもとで再編・統合することを目指しています。設立当初からの理念である「限りある自然と人間の共生」を指向し、「持続的社会的構築」という緊急かつ現実的な課題に応えるために、関連する様々な領域をつらぬいて新領域を切り開く統合知を究明していきます。

沿革

- 平成 3 (1991) 年 4月 「人間・環境学研究科 人間環境学専攻」開設
- 平成 4 (1992) 年 10月 「文化・地域環境学専攻」設置
- 平成 5 (1993) 年 4月 「人間・環境学専攻」に博士後期課程設置
- 平成 7 (1995) 年 4月 「文化・地域環境学専攻」に博士後期課程設置
- 平成 8 (1996) 年 3月 人間・環境学研究科棟竣工
- 平成 8 (1996) 年 4月 博士課程（5年一貫制）「アフリカ地域研究専攻」（特別専攻）設置
- 平成 9 (1997) 年 4月 「環境相関研究専攻」設置
- 平成 10 (1998) 年 4月 「アジア・アフリカ地域研究研究科」の開設に伴い、特別専攻及び東南アジア地域研究講座が移管
- 平成 11 (1999) 年 4月 「環境相関研究専攻」に博士後期課程設置
- 平成 15 (2003) 年 4月 総合人間学部との一体化に伴い学部に基づき大学院として組織を改編し、「共生人間学専攻」、「共生文明学専攻」、「相関環境学専攻」設置

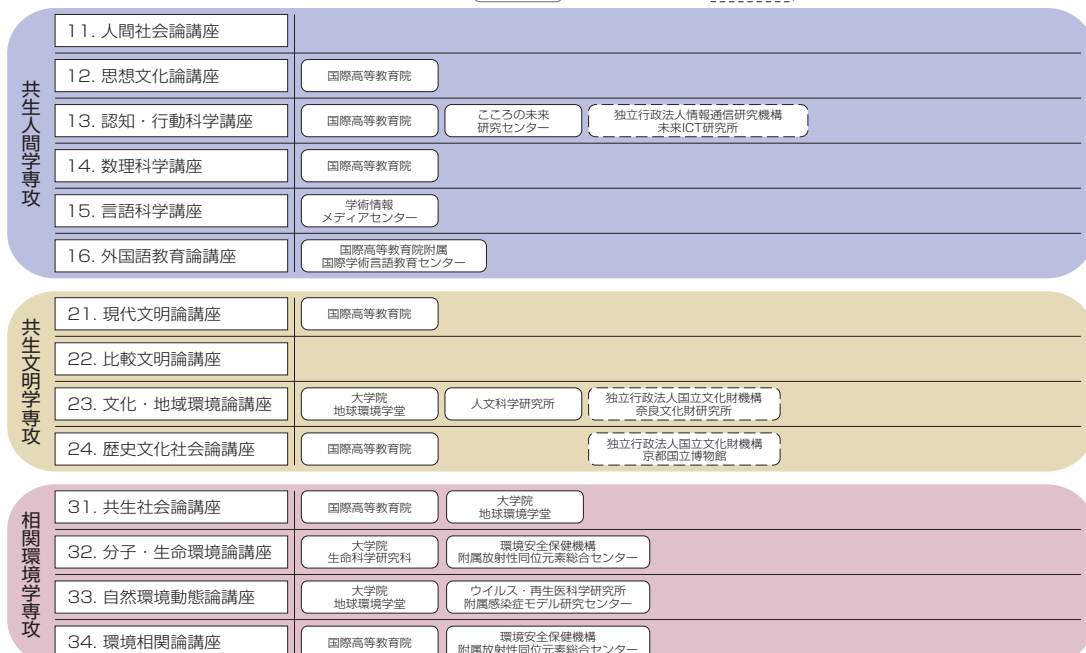
●教育課程の変遷

	専攻名	修士課程 設置年度	博士後期課程 設置年度
平成 15 年 3 月以前	人間・環境学専攻	平成 3 年度	平成 5 年度
	文化・地域環境学専攻	平成 5 年度	平成 7 年度
	環境相関研究専攻	平成 9 年度	平成 11 年度
平成 15 年 4 月以降	共生人間学専攻	平成 15 年度	平成 15 年度
	共生文明学専攻		
	相関環境学専攻		

連携・協力関係

本研究科では、専任教員のみならず、学内他部局（大学院地球環境学堂、大学院生命科学研究所、人文科学研究所、ウイルス・再生医学研究所附属感染症モデル研究センター、学術情報メディアセンター、こころの未来研究センター、国際高等教育院、国際高等教育院附属国際言語教育研究開発センター、環境安全保健機構附属放射性同位元素総合センター）ならびに学外機関（独立行政法人情報通信研究機構未来 ICT 研究所、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館）の協力を得て、教育・研究体制をより充実したものとしています。

() 学内他部局 (---) 学外部局



大学院人間・環境学研究所 教員構成

* 協力教員 **流動教員 併任教員 客員教員
 ※総合人間学部兼任教員 ※学外非常勤講師

平成31(2019)年4月1日現在

大類	学部	講座名	分野名	教授	准教授	講師	助教	
共生人間学専攻	人間科学系	11 人間社会論	人間形成論	倉石一郎 大倉得史	松本卓也 石岡 学	タジャン・ニコラ・ピエール (特定准教授)		
			人間共生論	連携機関：独立行政法人国立特別支援教育総合研究所				
			社会行動論	吉田 純 永田素彦	柴田 悠			
		12 思想文化論	文化社会論	田邊玲子 松田英男 多賀 茂	木下千花			
			人間存在論	佐藤義之 安部 浩 戸田剛文	青山拓央			
			創造行為論	岡田温司	栗山智成 武田宙也			
	認知情報学系	13 認知・行動科学	文芸表象論	水野尚之 廣野由美子 ^併 奥田敏広	小島基洋			
			認知科学	齋木 潤 月浦 崇 小村 豊* 内田由紀子*		山本洋紀		
			生理心理学	※宮内 哲 連携機関：国立研究開発法人情報通信研究機構 未来 ICT 研究所				
		14 数理科学	行動制御学	石原昭彦 神崎素樹 ^併 久代恵介	田中真介*			
			身体機能論	林 達也 船曳康子		江川達郎		
			現象象理論	上木直昌 清水扇丈 足立匡義 ^併 角 大輝	木坂正史			
	15 言語科学	数理情報論	立木秀樹 日置尋久	櫻川貴司	ディレクト、マシュー ジョセフ (特定講師)			
		言語情報科学	藤田耕司 谷口一美	守田貴弘				
		言語比較論	服部文昭 河崎 靖 壇辻正剛*	西脇麻衣子 南條浩輝*				
	16 外国語教育論	言語情報システム論	連携機関：独立行政法人情報通信研究機構 ユニバーサルコミュニケーション研究所					
外国語教育論		西山教行	中森誉之 ピーターソン、マーク					
言語教育研究開発論		スチュワート、ティモシー*	タルスキー、デビッド* 塚原信行* 高橋 幸* 金丸敏幸* 笹尾洋介*					
			神谷之康 ^専		細川 浩 ^専			
共生文明学専攻	国際文明学系	21 現代文明論	文明構造論	江田憲治 大川 勇 細見和之 ^併 那須耕介				
			現代社会論	大黒弘慈	柴山桂太	鶴飼大介		
			国際社会論	土屋由香	見平 典 齋藤嘉臣			
	文化環境学系	22 比較文明論	多文化複合論	小倉紀蔵	勝又直也			
			地域文明論	赤松紀彦 太田 出				
			文明交流論	岡 真理	中筋 朋			
	23 文化・地域環境論	文化人類学	風間計博	岩谷彩子** 石井美保*	コーカー、ケイトリン クリスティーン (特定講師)	梶丸 岳		
		地域空間論	小島泰雄 小方 登 山村亜希					
		環境構成論	増井正哉 中嶋節子			藤原 学 佐野泰之 (特定助教)		
		文化遺産学	玉田芳英 ^客 高妻洋成 ^客 尾野善裕 ^客	馬場 基 ^客 山崎 健 ^客 = 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所				
国際文明学系	24 歴史文化社会論	歴史社会論	元木泰雄 合田昌史	吉江 崇	バッテ、パツラ ヴィ (特定講師)			
		東アジア文化論	道坂昭廣 辻 正博 ^併 須田千里	佐野 宏 長谷川千尋 松江 崇				
		西欧文化論	水野眞理 桂山康司	池田寛子				
	博物館文化財学	宮川禎一 ^客 山川 暁 ^客	浅瀨 毅 ^客 大原嘉豊 ^客 = 独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館					
相關環境学専攻	自然科学系	31 共生社会環境論	共生社会環境論	浅野耕太 小畑史子 ^併 佐野 巨** 宇佐美 誠 ^専 (授業担当)				
			分子・生命環境論	分子環境相關論	津江広人 小松直樹 藤田健一	廣戸 聡	高橋弘樹 新林卓也	
		32 分子・生命環境論	生命環境相關論	宮下英明 川本卓男* 高田 稔*	土屋 徹 小林純也*	神川龍馬 藤吉 奏 (特定助教)		
			33 自然環境動態論	生物環境動態論	加藤 眞 瀬戸口浩彰** 市岡孝朗	西川完途** 三浦智行*	幡野恭子 阪口翔太** 佐藤博俊	
	地球環境動態論	鎌田浩毅 阪上雅昭 石川尚人 酒井 敏 杉山雅人 梶井克純** 小木曾 哲			加藤 護 坂本陽介**			
	34 物質相關論	物質物性相關論	吉田鉄平 高木紀明 森成隆夫 舟橋春彦*	藤原直樹 木下俊哉	小山田貞 渡邊雅之 佐野光貞 小西隆士 大槻大毅			
		物質機能相關論	内本喜晴 田部勢津久 吉田寿雄	戸崎充男*	上田純平 山本 旭 山本健太郎 内山智貴 (特定助教)			
				千坂 修 ^専	吉村成弘 ^専			

の分野については、学生の募集は行わない

学際教育研究部 部長(兼) 阪上雅昭 教授 副部長(兼) 水野尚之 教授 特定助教(兼) 佐野泰之	大学院教育研究推進部門	学部教育研究推進部門	講演会・地域連携等推進部門	広報活動・プロジェクト等推進部門	(兼) 野村龍一 (白眉センター特定准教授)
	(兼) 齋木 潤 教授 (兼) 津江広人 教授 (兼) 谷口一美 教授	(兼) 月浦 崇 教授 (兼) 戸田剛文 教授 (兼) 大倉得史 教授	(兼) 田部勢津久 教授 (兼) 岡田温司 教授 (兼) 宮下英明 教授 (兼) 永田素彦 教授	(兼) 日置尋久 教授 (兼) 小倉紀蔵 教授 (兼) 佐野 宏 准教授 (兼) 柴山桂太 准教授	(兼) 丸山善宏 (白眉センター特定助教)

外国人教師	(ドイツ語) トラウデン、ディーター	(フランス語) メニル、エヴリーヌ
-------	--------------------	-------------------

学際教育研究部

概要

学際教育研究部は、2008年度に大学院人間・環境学研究科内に設置された部局内センターで、①大学院教育研究推進部門、②学部教育研究推進部門、③講演会・地域連携等推進部門、④広報活動・プロジェクト等推進部門、の4部門からなり、学際的な教育研究活動の推進・支援を目的として次の業務を行っています。

- (1) 学際的な教育研究プロジェクト等の推進事業の企画、立案及び運営に関すること
- (2) 学際的な教育研究の推進に係る支援策の企画、立案及び運営に関すること
- (3) 学際的な講演会等の企画、立案及び運営に関すること
- (4) 学際的な教育研究活動の情報発信に関すること
- (5) その他学際的な教育研究活動の推進及び支援に関すること

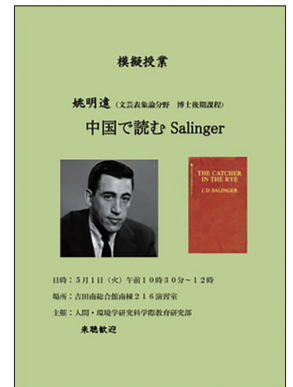
2018年度の活動

模擬授業

将来、大学の教壇に立つ人たちのために講義の練習を行う場として模擬授業を開催しています。学会発表とは違い、聞いている人の関心をいかに喚起するかが重要なポイントです。

主催 人間・環境学研究科 学際教育研究部

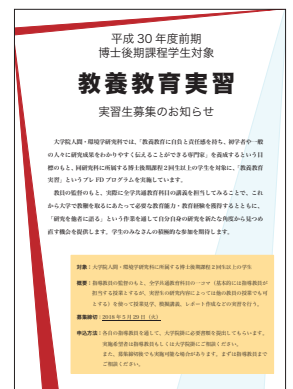
- ・ 小林 亜由美 (共生人間学専攻 思想文化論講座 文芸表象論分野 D1)
「フラッパーから社会活動家へ —— Nancy Cunard の Negro 編纂」
日 時：2018年4月10日(火) 10:30～12:00
会 場：吉田南総合館南棟 216 演習室
- ・ 姚 明遠 (共生人間学専攻 思想文化論講座 文芸表象論分野 D1)
「中国で読む Salinger」
日 時：2018年5月1日(火) 10:30～12:00
会 場：吉田南総合館南棟 216 演習室



教養教育実習

人間・環境学研究科では、「教養教育に自負と責任感を持ち、初学者や一般の人々に研究成果をわかりやすく伝えることができる専門家」を養成するという目標のもと、当研究科に所属する博士後期課程2回生以上の学生を対象に、「教養教育実習」というプレFDプログラムを実施しています。教員の監督のもと、実際に全学共通教育科目の講義を担当してみることで、これから大学で教鞭を取るにあたって必要な教育能力・教育経験を獲得するとともに、「研究を他者に語る」という作業を通して自分自身の研究を新たな角度から見つめ直す機会を提供します。

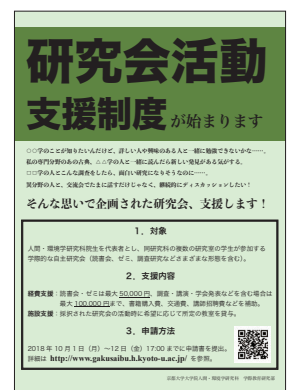
- 【対象】 大学院人間・環境学研究科に所属する博士後期課程2回生以上の学生
- 【概要】 指導教員の監督のもと、全学共通教育科目の一コマ（基本的には指導教員が担当する授業とするが、実習生の研究内容によっては他の教員の授業でも可とする）を使って授業見学、模擬講義、レポート作成などの実習を行う
- 【申込方法】 各自の指導教員を通して、大学院掛に必要書類を提出
- 【2018年度実績】 12名 前期：5名(D2(3名)/D3(2名)) 後期：7名(D1(1名)/D2(1名)/D3(5名))



研究会活動支援制度 (2018年度後期)

学際教育研究部では、人間・環境学研究科における学際的な学術交流を促進することを目的として、人間・環境学研究科の複数の研究室の大学院生が協力して運営する研究会活動（読書会、ゼミ、調査研究などさまざまな形態を含む）を支援する取組みとして、研究会活動支援制度を開始しました。

- 【支援内容】
 - ・ 経費支援：研究会につき50,000円（調査・講演・学会発表等を含む場合は100,000円）を上限として、研究会の実施に関わる費用を補助
 - ・ 施設支援：採択された研究会の希望に応じて所定の教室を貸与
- 【補助の対象期間】
 - ・ 2018年11月1日～2019年2月28日に実施される研究会
- 【申請資格】
 - ・ 学生が自主的に実施する研究会であること
 - ・ 人間・環境学研究科における学際的な学術交流に資する活動内容であること
 - ・ 3名以上のメンバーで構成されていること
 - ・ 異なる研究室に所属する人間・環境学研究科院生をメンバーに含むこと
 - ・ 代表者は人間・環境学研究科院生であること



第3回 総人・人環・学際セミナー「水」をめぐる科学・経済・芸術

日時：2018年11月29日(木) 16:30～18:00

会場：京都大学 人間・環境学研究科棟 地下大講義室

主催：人間・環境学研究科 学際教育研究部

備考：入場無料、事前予約不要

■プログラム

- ・「切り離されてあるもの——汀の庭園論」
山内 朋樹（京都教育大学講師）
- ・「京都の暮らしと琵琶湖疏水」
根来 健（龍谷大学非常勤講師、元京都市上下水道局技術監理室水質管理センター所長）
- ・「水と経済」
浅野 耕太（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
- ・質疑応答・ディスカッション
村上 絢一（人間・環境学研究科共生文明学専攻 D2・「総人のミカタ」メンバー）
山守 瑠奈（人間・環境学研究科関連環境学専攻 D1・「総人のミカタ」メンバー）



シンポジウム等の共催

■ The Winter's Tale (シェイクスピア『冬物語』の原語での上演会) (2019年1月6日(日) 14:30開演)

会場：人間・環境学研究科棟 地下大講義室 / 実施責任者：柴山智成（人間・環境学研究科准教授） / 主催：「舞台芸術演習 B」の受講生を主体とした総合人間学部学生・人間・環境学研究科大学院生、および順天郷大学(韓国) Professor Hyon-u Lee 教授と指導学生

■ The 29th Meeting on Glasses for Photonics (2019年1月28日(月))

会場：京都大学吉田南キャンパス / 主催：日本セラミックス協会ガラス部会フォトンクス分科会

■ アーティストブリッジ2019 in 京都 「封鎖に抗して ガザ・アーティストは語る」(2019年2月27日(水))

会場：人間・環境学研究科棟 地下大講義室 / 主催：京都大学大学院人間・環境学研究科 岡 真理研究室

■ 日本藻類学会第43回京都大会および公開シンポジウム(2018年3月16日(土)～17日(日))

会場：京都大学吉田南キャンパス / 主催：日本藻類学会

■ 山岡記念財団 若者文化シンポジウム

「日本とドイツのメディアカルチャー——「日独の若者文化・ライフスタイルの研究」ワークショップ」(2019年3月19日(火))

会場：京都大学楽友会館 2階 会議・講演室 / 主催：一般財団法人山岡記念財団

領域交差型院生 FD 総人のミカタ

総人のミカタは、人間・環境学研究科の大学院生が、主に総合人間学部の学生向けに、毎週木曜日5限目にリレー形式の模擬講義を行っているものです。参加は自由で、大学院生による組織「総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会」が主催、学際教育研究部が後援しています。

講義の後には、院生や他の参加者と気軽に話せるフリートークや、院生メンバーでの講義の内容や方法についての検討会も行っています。

主催：人間・環境学研究科院生による総合人間学部生向け模擬講義企画「総人のミカタ」運営委員会

後援：学際教育研究部（京都大学総合人間学部、人間・環境学研究科）

平成30年度の活動

・講義回数 前期13回・後期12回

・活動報告書の発行

『「総人のミカタ」活動報告書 2017年度前期～2018年度前期』

(2018年10月発行)



報告書等の発行

『学際系学部の教養教育 報告書

教員にとっての学際／学生にとっての学際』(2017年3月発行)

2015年12月19日に人間・環境学研究科にて実施された

ワークショップ「学際系学部の教養教育」の報告書

『総人・人環 卒業生・修了生インタビュー』(2018年3月発行)

卒業生・修了生へのインタビューの記録

『総人・人環 卒業生・修了生インタビュー』Vol.2 (2019年3月発行)

卒業生・修了生へのインタビューの記録



共生人間学専攻

本専攻は、個体としての人間がどのような基本的な機能を持つかを解明しつつ、その人間が共同体をなして共生を目指す存在であることを解明します。前者は主に身体的・精神的諸機能の解明を目指す認知・行動科学研究領域、人間の数理的認識作用の体系化を目指す数理科学研究領域、人間の言語と知的メカニズムとの関係を明らかにする言語科学研究領域において取り組まれています。後者は、個人と共同体との相互規定的な関係を解明する人間社会論研究領域、人間の根源を問い直して共生の可能性を探る思想文化論研究領域、人間相互の共生に不可欠な言語の獲得と運用を、教育との関連で究明する外国語教育論研究領域において取り組まれています。

人間社会論講座

人間と共同体の諸関係の多面的考察

人間はその誕生から死に至るまで、歴史的、社会的、文化的存在として周囲の人たちと共に生きています。この観点に立って、人間形成の過程にはどのような共生の可能性とその困難があるか、個人の社会的行動に対して集団や社会や文化はどのような影響を及ぼしているか、人間の芸術活動は歴史や社会や文化によってどのように規定されているかといった点から教育研究を行います。

●人間形成論分野

人間形成過程にみられる社会化の問題及び人間同士の共生の問題を研究します。

●社会行動論分野

社会学、社会心理学、グループ・ダイナミックスの観点から人間の社会的行動に関する研究を行います。

●文化社会論分野

文芸テキスト・映画テキストなどの芸術媒体が、そのテキストが生まれた時代や社会といかなる相関関係を結びつつ、同時代のイデオロギーから脱皮しうるのかを講究します。

思想文化論講座

人間の思想・行動・感情等の表現形態の考察

人間がその思考・行為・感情をいかに表現してきたかを思想的・芸術的・文学的視点から具体的に検証しながら、「人間とは何か」という人間存在の根本的な問題を問い直し、人間相互の、そしてまた人間とそれらを取り巻く環境との間の共生のあり方を探究するための教育研究を行います。

●人間存在論分野

人間とは世界や他者・自己と、認識的・実践的に関係することにより人間として存在するものです。このような人間存在を哲学的に探求します。

●創造行為論分野

西洋及び日本の美学、芸術思想、芸術史研究を中心に人間の創造行為を探究します。

●文芸表象論分野

近現代の英米文学、及びドイツ文学・思想などのテキスト考証を通して、文芸表象の諸問題を探求します。

認知・行動科学講座

生命科学にもとづく人間の認識と行動原理の考察

認知・行動科学では、脳・神経科学、認知科学・心理学、運動医科学・生理学、健康科学、代謝・栄養学を基盤にして、精神的・身体的な諸機能の基本的なメカニズムの解明とそれらの諸機能の発達過程と形成方法の研究を行います。さらに健康づくりとスポーツ運動に関する基礎的、実践的研究を行います。これらの成果をもとに、人類が生命・健康・発達を十分に実現していくために重要となる医療制度・健康教育システム・健康生活設計・社会システム等のよりよいあり方について総合的に研究し、実践活動を構想し展開していきます。

●認知科学分野

認識、思考、意識、学習、記憶・感情、自己などを、神経科学的、認知心理学的、ならびに、社会心理学的方法によって探求します。

●行動制御学分野

行動制御や身体機能を、発生から死までの生物学的時間軸と、地域から宇宙までの空間軸に展開しながら考究します。

●身体機能論分野

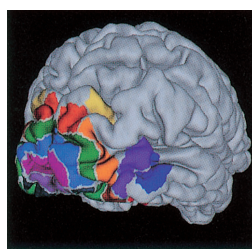
身体の基礎生理学、病理学を基盤として、肥満や生活習慣病、精神疾患、発達障害のメカニズムを探求します。



コミュニティによる教育



時代を超えて伝えられる
人類の叢智



視覚の脳地図



寝たきり予防・改善の筋電気刺激(応用生理学研究室)

- 人間相互の共生に関する諸問題を高度な知識と先見性をもって解決できる実務家
- 人間の根本問題を探究できる研究者・教育者
- 高齢者のターミナル・ケア、精神障害者や心身障害者のノーマライゼーション・インクルージョンに対して理論的・実践的に指導できる人材
- 保育や教育の現場に対してはもちろん、保育行政や教育行政に対しても理論的・実践的に指導できる人材
- 人間の認知・行動・学習・推論・言語のメカニズムや様々な身体機能を解明し、それを社会に展開できる研究者・教育者・実務者
- 数学、情報学の研究・教育機関等で活躍できる人材
- 外国語教育の研究・教育機関等で活躍できる人材

数理科学講座

推論と計算による数理的認識

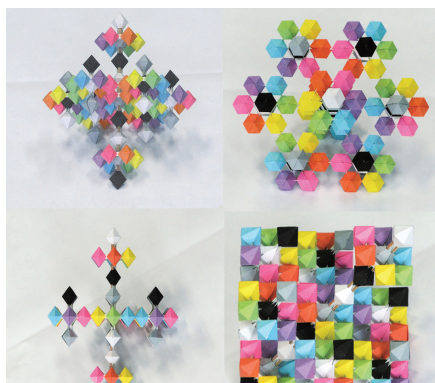
数理科学は、数・量・図形などに関する学問というような狭い意味での数学そのものではなく、情報科学や計算機科学など関連諸科学をも視野に入れた、より広範な学問です。本講座では、微分方程式論、力学系理論、確率解析などに基づく数学的手法を用いて様々な現象の変動過程の数理構造の解明をめざすとともに、数理情報理論、計算機構論、画像解析論などを基盤として、情報処理の諸問題に関して理論と応用の両面から探求するための教育研究を行います。

● 現象数理論分野

常微分方程式、偏微分方程式、確率微分方程式、確率過程、離散力学系、複素力学系、カオス・フラクタル理論などを用いて記述される様々な数理的現象を解析します。

● 数理情報論分野

計算の論理と数理、プログラミング言語、メディア情報処理、機械学習、パズル・ゲームの数理、データサイエンス、量子計算などの情報科学諸分野について理論と応用の両面から探求します。



フラクタル数独オブジェ

言語科学講座

自然言語の構造と機能の解明

言語は人間を大きく特徴づける認知能力であり、思考やコミュニケーションをはじめとする多くの機能を担っています。この心的機構の仕組みの解明を通じ人間の心の作用を理解することを目標にして、言語の構造と機能、他の諸認知能力との関わりを理論言語学的に探究するとともに、言語体系の法則性や言語変化のメカニズムを比較言語学的に明らかにするための教育研究を行います。

● 言語情報科学分野

言語の構造と機能、他の諸認知能力との関わりを理論言語学的に探究するとともに、学際的視野から言語の生物学的基盤についても考察します。

● 言語比較論分野

言語体系の法則性・言語変化のメカニズムを探る方法論に関する言語学の諸問題を講究します。

外国語教育論講座

外国語習得のメカニズムの解明と
外国語教育法の開発

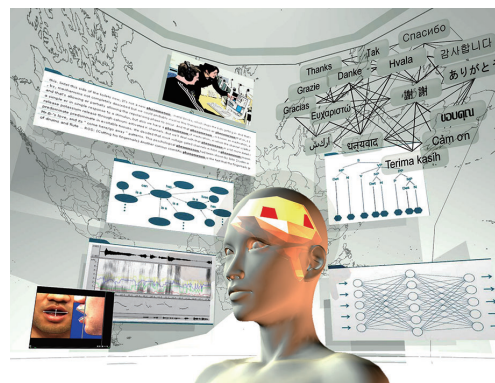
世界で人間が共生していくためには、言語による人間相互理解が不可欠です。本講座では、外国語教育を有意義なものにするために、外国語習得のメカニズムを解明し、それに立脚して、カリキュラム、教材、学習形態、指導方法、評価方法、指導体制、学習支援環境、教育経営、言語政策等の研究開発を行います。

● 外国語教育論分野

外国語習得論、応用言語学、外国語教育学、言語政策等の知見に立脚し、外国語教育論の構築をめざします。

● 言語教育研究開発論分野

教育言語学、異文化理解教育論、教育経営論、授業研究論、教授法・教材開発論等の知見に立脚し、言語教育の研究開発をめざします。



現代言語科学：人間理解への統合的アプローチ

共生文明学専攻

国際的緊張や地域紛争など文明間の対立が深刻化する今日において、これを回避するために文明間の絶えざる「対話」がいまほど強く求められている時代はありません。本専攻はこのような地球的視点と未来への展望をもとに、「文明相互の共生」を可能にする方策を探求する学、すなわち「共生文明学」を目指すものです。

本専攻では、自然と人間を対峙させ自然を制御することを文明の営みとしてきた西欧文明と、自然と人間との共生を文明の営みとしてきた地球上の他の文明とを考察することによって、「文明相互の共生」を可能にする方策を探求し、関連する諸問題を解決できる人材を育成するための教育研究を行います。

現代文明論講座

西欧近代主義の成果と問題点の再検討

西欧近代主義のもたらした成果とそれが生み出した困難な問題を、法律、政治、経済、社会、文学、思想、科学論などを相関させて究明します。併せて現代のグローバル化や情報化という社会環境の急激な変化がもたらした問題を踏まえ、西欧近代主義をも相対化しようとする斬新かつ大胆な文明の理念の構築を目指し、文明相互の共生に資するための教育研究を行います。

● 文明構造論分野

社会制度、思想、法律、文学などを、歴史的・構造的に比較・分析するとともに、文化諸領域の特質と問題点を考察します。

● 現代社会論分野

現代文明の特質や課題を明らかにするとともに、近代における社会経済機構を経済研究と統計研究の両面を通して解明します。

● 国際社会論分野

法律・政治・社会・思想・文化など幅広い領域を横断する方法論を模索しながら、現代国際社会の問題を考察します。アメリカ合衆国やヨーロッパ諸国の国家形成・発展の過程および対外関係を、日本との比較を意識しつつ再検討することを共通の課題としています。

比較文明論講座

各文明の地域的特性の比較、交流関係の考究

非西欧文明は、西欧文明との衝突と受容を通して、みずからの地域文明の特性を維持するという、苦悩に満ちた歴史を経験してきました。グローバル化が進行するいま、各文明の地域的特性を多角的に比較するとともに、文明相互の交流とその文化的所産、さらには文明の自己相対化の諸相を、歴史的パースペクティブと構造的分析の複眼的視点から解明するための教育研究を行います。

● 多文化複合論分野

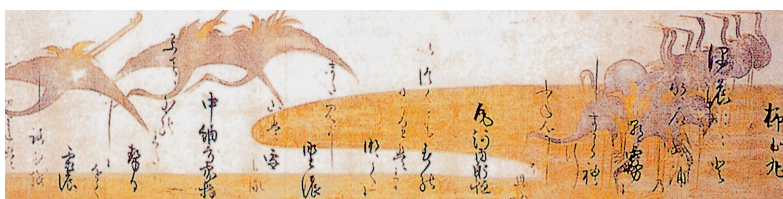
文明内部あるいは文明間における多様な文化の邂逅とその複合による新たな文化的状況の醸成を考究します。

● 地域文明論分野

歴史的視点に立って、各文明の文化社会的営為とそれらの関係性のなかに地域的特性を考究します。

● 文明交流論分野

非西欧文明と西欧文明が相互に同化あるいは異化する文明交流の歴史的文化的諸相を考究します。



宗達、光悦合作・鶴図下絵和歌巻（重要文化財）
（京都国立博物館蔵）

育成を目指す人材像

- 国際問題、民族問題、地域問題に関する根本問題に通暁した研究者・実務家
- 多元文化社会に対する深い専門性をもつ実務家（国際交流関係機関職員、地方自治体行政官や研究者、環境関連の民間研究所職員、環境関連の民間企業の実務指導者等）
- 都市開発、景観保全、文化や地域環境のあり方に対して積極的に提言できる研究者、行政的実務者
- 異文化知識を十分に踏まえて文化交流を推進できる行政的実務者
- 社会の政治的・経済的動向を的確に予測して社会の発展に寄与できる研究者・実務家
- 国際的緊張や地域紛争に見識をもって対応できるジャーナリスト、ジャーナリズムの分野でオピニオン・リーダーとして活躍できる人材
- 文化遺産・文化財の保存修復、分析に関する研究者・実務家

文化・地域環境論講座

民族・地域の特性と人間社会の基本的な居住の諸相の
考究

長い歴史的過程のなかで育まれてきた固有の民族・地域の特性や居住の諸相を「文化・地域環境」として捉え、文化・地域環境の生成・展開・構築・保全の諸過程や現状を解明し、共生を基本とする文化・地域環境の構築法を探究するための教育研究を行います。

● 文化人類学分野

フィールドワークにもとづき、地球上の諸集団における自然・文化・社会の関わりを動的に分析し、人類の特性を解明します。

● 地域空間論分野

地理学を方法論の軸としつつ、様々な時代の世界の諸地域について、リアリティと斬新さを重視して研究します。

● 環境構成論分野

都市や建築による環境構成の歴史と未来に対し、広範な理論的視野を確保しつつ、歴史・文化の文脈を考究します。

● 文化遺産学分野（奈良文化財研究所）

文化遺産に関する諸分野の実践的研究を通じ、その保護に資するとともに、歴史・文化の諸相を考究します。

歴史文化社会論講座

歴史と文化の相互交渉的関係の考究

地球上の諸文明と、それらを育んできた歴史文化社会とを、普遍性と特殊性及び共生可能性を展望しながら考究します。特に、東アジア及び欧米の歴史的・文化的・社会的特性を、通時的かつ共時的に解明することにより、歴史と文化の相互交渉的関係をよりダイナミックで立体的なものとして捉え直すための教育研究を行います。

● 歴史社会論分野

日本及び欧米における文明と社会の関わり方を歴史的視点から考察します。

● 東アジア文化論分野

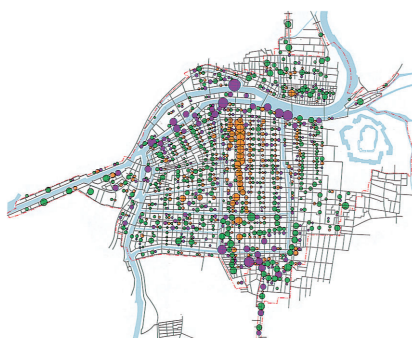
日本の社会・文化・言語・思想・文学、および近代以前の中国の社会・文化・言語・文学を考察します。

● 西欧文化論分野

西欧古代に端を発するルネサンスから近代にいたるイギリス文学・文化を考察します。

● 博物館文化財学分野（京都国立博物館）

博物館における文化財・美術作品の調査研究を通じて、作品の取り扱いや保存方法や展示作業等を多角的に学び、文化財への総合理解を深めます。



明治前期の大阪の業種別商店分布図



朝鮮時代の『孟子』告子編の一部（右）
『資治通鑑』を読み下した朝鮮時代の句吐資料（左）



漢代の函谷関遺跡
(2014年11月調査時に撮影)

相関環境学専攻

人間の未来は、われわれ人間がどのようにして自然と人間の調和的共生を図り、いかにして科学・技術と産業とをこの調和的共生に向けて導いていくかに懸かっています。本専攻は、自然と人間の調和的共生を可能にする新しい科学・技術のあり方及び社会システムのあり方を探求する学、すなわち「相関環境学」を目指すものです。

本専攻では、従来の科学・技術・産業に内在する「開発」の論理を見直し、人類を含めた生態系全体の存続に寄与する「自然と人間との共生」の論理を学問的営為に根付かせるため、新しい科学・技術のあり方を探求するとともに、自然と人間との共生を図る新しい社会システムのあり方を探求します。同時に、関連する諸問題を解決できる人材を育成するための教育研究を行います。

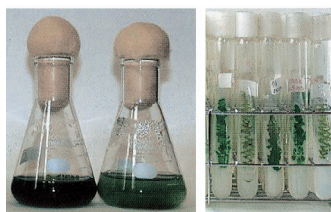
共生社会環境論講座

持続可能な人間社会の新しいあり方の究明

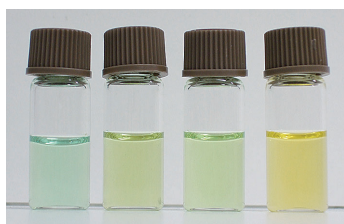
新しい共生社会のあり方を究明するために、環境をめぐる資源配分の現状と課題について教育研究を行ないます。また、働く人が職場で直面している課題を解決するための法制度のあり方を探究します。新しい社会システムにおいて公共的な意思決定はどのようにあるべきかという意思決定の問題を追求するための教育研究を行ないます。

● 共生社会環境論分野

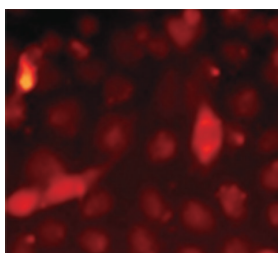
人間と環境との関わりの様態を、社会制度、市場、空間、法システムなどの見地から考察します。



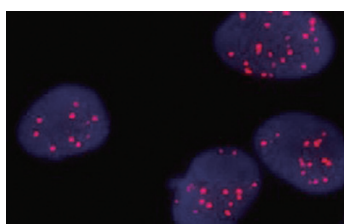
シアノバクテリアの培養



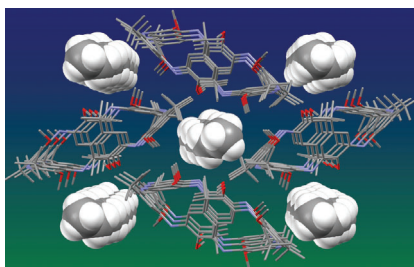
さまざまな光合成色素



細胞内から蛍光を発するナノダイヤモンド



蛍光顕微鏡による2つのDNA修復因子の結合検出



気体分子を吸着する有機結晶

分子・生命環境論講座

分子、生命、資源の相関研究

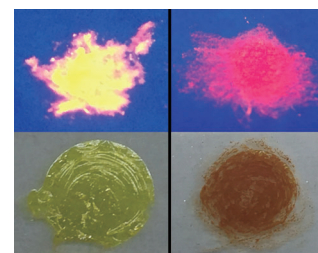
有機資源と環境、生命と環境の相関に基づいた諸問題についての教育研究を行います。すなわち、有機資源の構造や機能を明らかにして、資源の持続的有効利用と有用な物質に変換する低環境負荷技術の開発をするとともに、生物が種々の環境に適応するメカニズムや有機資源を効果的に産出する機能を探求します。

● 分子環境相関論分野

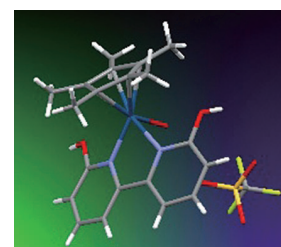
有機資源・物質の基盤となる有機分子・物質の持つ構造ならびに機能とその発現のメカニズム、金属や生体との相互作用を講究します。

● 生命環境相関論分野

藻類の多様性と進化の解明、生体内光エネルギー変換系の解析、放射線リスク・影響の生物学的解析、生物材料工学に関する研究・開発、ゲノム安定性の分子メカニズムの解明など、生命環境に相関した諸問題の解明を目指します。



有機色素の刺激応答性：刺激前（左）：後（右）



高活性脱水素化金属錯体触媒の分子構造

育成を目指す人材像

- 人間と自然の共生に関する諸問題を、高度な知識と科学的・論理的判断力を持って解決できる研究者、実務者
- 自然科学・理系学問に通暁して、科学的・客観的な判断力を備えた行政官、外交官、ジャーナリスト、研究者
- 環境関連の民間企業や公的研究所の研究者、企画立案者として活躍できる人材
- 地域から地球規模にわたる自然環境問題に通暁し、社会における環境教育や企業での環境保全に配慮した業務を担当できる人材
- 有機・生物資源の持続的有効利用のための変換プロセスや、低環境負荷技術を構築する研究開発を担当できる人材
- 物質とエネルギーの機構やダイナミクスについて広い視野を持って、先端的研究開発を行う人材
- 未来社会を支える新しい機能性材料の研究開発を行う人材

自然環境動態論講座

地球規模の環境変動と自然環境の動的関係、
生物の多様性と群集構造、生態系機能の考察

地球規模での環境変動と自然環境の動的関わりを、地球表層の構造とそこに生存するウイルスをも含めた生命体の考察から明らかにします。あわせて、生物の多様性や種間相互作用が生態系の安定性に寄与する機構を解明することによって、自然と人間との自立的な関わり方の限界特性を明らかにし、自然環境動態の将来予測を行うための方法論と実際を教育研究します。

● 生物環境動態論分野

生物の種間関係が生態系や生物の進化・多様化に与える影響や、ウイルスと宿主の進化動態を中心に、生物の自然史を講究します。

● 地球環境動態論分野

地球環境を構成する気圏・水圏・地圏の組成・構造や物理学的・化学的動態、地球・宇宙のダイナミクスと進化について講究します。

物質相関論講座

物質・エネルギー間の相互変換メカニズムと
その制御法の開発

物質自然界の有効な制御を目的とし、原子分子の集合体としての物質における安定構造の決定要因、及び外的刺激による応答のメカニズムを解明すること、すなわち、物質とエネルギーの変換ダイナミクスの解明にとりくみます。これを基礎に、新たな機能を発現する機能的物質の開発・創成のための方法論と実際を教育研究します。

● 物質物性相関論分野

物質の組成や相構造と物性の相関、物質とエネルギーの変換のメカニズムを解析します。

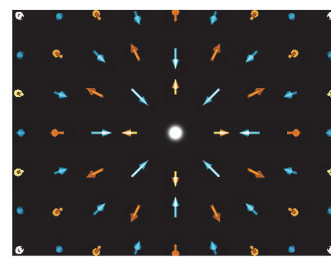
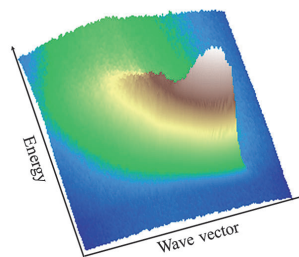
● 物質機能相関論分野

物質機能とそれにかかわる因子を解析し、新素材・新機能性物質の開発を目指します。

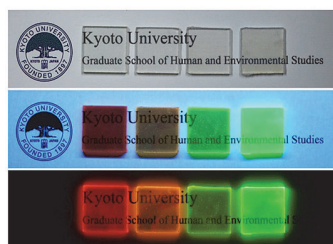


由布岳のエヒメアヤメ

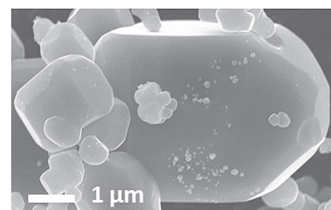
奄美大島
シの原生林の一斉開花



高温超伝導体の準粒子励起 (左) とスカイミオンモデル (右)



光を蓄える長残光結晶化ガラス



二酸化炭素還元反応用の光触媒

入学者・修了者の推移

●修士課程 入学者数

年度	25	26	27	28	29	30
共生人間学専攻	79	69	67	51	67	77
入学定員 69	(20)	(18)	(17)	(14)	(15)	(18)
共生文明学専攻	24	39	44	47	40	44
入学定員 57	(6)	(9)	(8)	(2)	(7)	(21)
相関環境学専攻	37	43	44	60	41	39
入学定員 38	(6)	(8)	(6)	(13)	(8)	(7)
合計	140	151	155	158	148	160
入学定員 164	(32)	(35)	(31)	(29)	(30)	(46)

・()内の数字は総合人間学部からの進学者で内数

●修士課程 学生数

(各年度5月1日現在)

年度	25			26			27			28			29			30		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
学生数	173	137	310	194	126	320	212	123	335	158	139	297	161	137	298	192	147	339
留学生数 (内数)	(9)	(37)	(46)	(17)	(23)	(40)	(20)	(31)	(51)	(20)	(43)	(63)	(25)	(44)	(69)	(23)	(48)	(71)

●修士課程 学位授与者数

修了年度	25	26	27	28	29	30
共生人間学専攻	52	72	64	63	48	66
共生文明学専攻	41	25	31	44	50	34
相関環境学専攻	37	33	39	44	52	42
合計	130	130	134	151	150	142

●修士課程 修了者の進路

修了年度	25	26	27	28	29
進学(大学院)	35	55	51	37	48
就職	80	63	70	87	87
その他	15	12	13	27	16
合計	130	130	134	151	151

●修士課程 修了者の産業別就職状況

修了年度		25	26	27	28	29	合計	
農業・林業・漁業		1	1	0	0	1	3	
建設業		1	1	1	1	0	4	
製造業	食料品等	1	0	2	1	2	6	
	繊維工業	0	1	0	2	2	5	
	印刷・同関連業	0	1	0	0	0	1	
	化学工業	12	4	3	0	10	29	
	鉄鋼業	1	2	2	7	3	15	
その他		13	8	16	18	15	70	
電気・ガス・水道等		2	0	0	2	2	6	
情報通信業		11	6	15	13	18	63	
運輸・郵便業		0	1	0	3	1	5	
卸売・小売業		3	5	4	2	1	15	
金融・保険業		7	2	3	7	8	27	
不動産・物品賃貸業		0	2	1	1	1	5	
サービス業	学術研究、 専門・技術	学術・開発研究機関	1	0	1	1	0	3
		法務	0	1	1	0	3	5
		その他	7	6	3	8	2	26
	宿泊・飲食		2	0	0	0	0	2
	生活関連、娯楽		0	1	0	1	1	3
	教育、 学習支援	学校教育	7	9	10	5	5	36
		その他	3	3	0	1	3	10
	医療、福祉	医療業、保険衛生	0	4	1	1	1	7
		社会保険・社会福祉・ 介護事業	0	0	0	1	1	2
	複合		1	0	0	0	0	1
その他		0	3	4	3	3	13	
公務員	国家公務員	4	0	0	4	2	10	
	地方公務員	2	2	1	5	2	12	
上記以外		1	0	2	0	0	3	
合計		80	63	70	87	87	387	

●博士後期課程 進学者・編入学者数

		年度	25	26	27	28	29	30
共生人間学専攻 入学定員 28	進学者		35	13	35	28	20	19
	編入学者		10	10	11	9	12	13
	計		45	23	46	37	32	32
共生文明学専攻 入学定員 25	進学者		15	15	8	13	12	20
	編入学者		2	4	9	7	4	6
	計		17	19	17	20	16	26
相関環境学専攻 入学定員 15	進学者		5	3	10	8	4	8
	編入学者		3	5	6	5	7	10
	計		8	8	16	13	11	18
総計 入学定員 68	進学者		55	31	53	49	36	47
	編入学者		15	19	26	21	23	29
	総計		70	50	79	70	59	76

●博士後期課程 学生数

(各年度5月1日現在)

	年度		25			26			27			28			29			30		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計		
学生数	172	148	320	153	137	290	144	145	289	158	142	297	161	137	298	180	134	314		
留学生数(内数)	(15)	(31)	(46)	(12)	(33)	(45)	(13)	(39)	(52)	(20)	(37)	(57)	(25)	(44)	(69)	(27)	(43)	(70)		

●博士学位授与の状況

		修了年度	25	26	27	28	29	30
博士後期 課程修了 によるもの	共生人間学専攻		21	24	35	19	17	27
	共生文明学専攻		12	11	12	13	11	10
	相関環境学専攻		7	9	2	5	6	10
	旧専攻		0	2	0	0	0	0
	合計		40	46	49	37	34	47
	累計		693	739	788	825	859	906
論文提出によるもの			0	4	6	2	0	1
累計			37	41	47	49	49	50

●博士後期課程修了者・研究指導認定退学者の進路

		修了年度	25	26	27	28	29
修了者数			69	70	61	46	60
就職			39	45	33	21	26
その他			30	25	28	25	34

●博士後期課程 修了者の産業別就職状況

			修了年度	25	26	27	28	29	合計
製造業				1	1	1	1	5	9
電気・ガス・水道等				0	0	0	0	0	0
情報通信業				0	0	0	1	2	3
卸売・小売業				0	0	1	1	0	2
サービス業	学術研究、 専門・技術	学術・開発研究機関		3	0	1	1	1	6
		法務		0	0	0	0	1	1
		その他		1	1	0	0	0	2
	宿泊・飲食			2	0	0	0	0	2
	生活関連、娯楽			0	0	0	0	0	0
	教育、 学習支援	学校教育		27	38	25	17	15	122
		その他		4	3	1	0	0	8
	医療、福祉	医療業、保険衛生		0	1	1	0	0	2
		社会保険・社会福祉・ 介護事業		0	0	0	0	0	0
		その他		1	1	0	0	0	2
公務員	国家公務		0	0	0	0	1	1	
	地方公務		0	0	0	0	0	0	
上記以外				0	0	3	0	1	4
合計				39	45	33	21	26	164

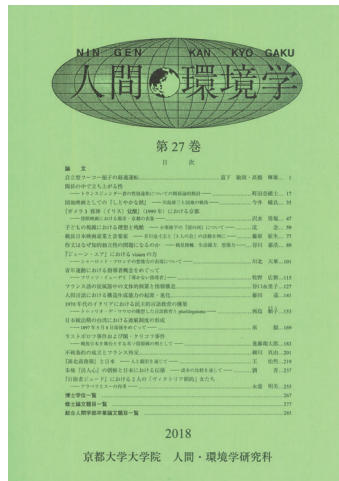
定期刊行物・定例行事

定期学術雑誌

『人間・環境学』

人間と環境の関わり方に関する未発表の論文、資料、総説、展望などを対象とした学術雑誌を、年に1回『人間・環境学』として発表し、広く配布しています。(平成4年創刊)

最新号：第27巻(2018年12月発行)



論文

- ・ An Optional Operation of a Free-Standing Foucault Pendulum
Toshinori MICHISHITA and Teruo TAKAHASHI
(自立型フーコー振子の最適運転
道下 敏則・高橋 輝雄)
- ・ 関係の中で立ち上がる性
—— トランスジェンダー者の性別違和についての関係論的検討 ——
町田 奈緒士
- ・ 団地映画としての『しとやかな獣』
—— 川島雄三と団地の戦後 ——
今井 瞳良
- ・ 『ガメラ3 邪神〈イリス〉覚醒』(1999年)における京都
—— 怪獣映画における都市・京都の表象 ——
沢水 男規
- ・ 子どもの視線における理想と残酷
—— 小栗康平の『泥の河』について ——
沈 念
- ・ 戦後日本映画産業と音楽家
—— 芥川也寸志と「3人の会」の活動を例に ——
藤原 征生
- ・ 作文はなぜ知的独立性の問題になるのか
—— 鶴見俊輔、生活綴方、想像力 ——
谷川 嘉浩
- ・ 『ジェーン・エア』における vision の力
—— シャーロット・ブロンテの想像力の表現について ——
川北 天華
- ・ 青年運動における指導者概念をめぐって
—— フリッツ・イエーデと「導かない指導者」 ——
牧野 広樹
- ・ フランス語の従属節中の文体的倒置と情報構造
谷口 永里子
- ・ 人間言語における構造成能の起源・進化
藤田 遥
- ・ 1970年代のイタリアにおける民主的言語教育の構築
—— トゥッリオ・デ・マウロの構想した言語教育と plurilinguismo ——
西島 順子よりこ
- ・ 日本統治期の台湾における渡航制度の形成
—— 1897年5月8日前後をめぐって ——
巫 靚
- ・ ラストボロフ事件および関・クリコフ事件
—— 戦後日本を舞台とする米ソ情報戦の例として ——
進藤 翔太郎
- ・ 不戦条約の成立とフランス外交
細川 真由
- ・ 『湖北商報』と日本
—— 人と翻訳を通じて ——
王 怡然
- ・ 朱権『活人心』の朝鮮と日本における伝播
—— 諸本の比較を通して ——
劉 青
- ・ Two "Victorian" Women in *Jude the Obscure*
—— A Reconsideration of Arabella and Sue ——
Akemi NAGAMORI
(『日陰者ジュード』における2人の「ヴィクトリア朝的」女たち
アラベスとスーの再考)
永盛 明美)

博士学位一覧

修士論文題目一覧

総合人間学部卒業論文題目一覧

広報誌

『総人・人環フォーラム』

「自然と人間の共生」という理念のもとに平成3年に創立された当研究科では、人間と環境との新しいかわりを模索してゆかため、『総人・人環フォーラム』を発刊しています。本誌では人間と環境の相互関係にふれる第一線の研究のうえにたつて、精神的な豊かさをもった広い視野から、21世紀における人類の課題を問い続けてゆきたいと考えています。

●第37号(平成31年2月28日)

巻頭言「複雑系と」地球環境

田村 類(京都大学名誉教授)

特集 来た・見た・考えた——フィールド手帳から——

セッション1:「地図と景観から歴史を読む——京大以前の吉田を探して——」

山村 亜希(人間・環境学研究科 准教授)

セッション2:「賀茂の流れと社叢林の植物学」

瀬戸口 浩彰(人間・環境学研究科 教授)

定例行事

公開講座

人間・環境学研究科では、学問・研究成果の社会への還元を図るため、年に一度公開講座を開催しております。

平成30年度

日時:平成30年8月9日(木) 13:30~17:00

会場:京都大学大学院人間・環境学研究科棟 地階大講義室

受講料:無料

テーマ:来た・見た・考えた——フィールド手帳から——

司会:神崎 素樹(人間・環境学研究科教授)

プログラム

セッション1:地図と景観から歴史を読む

講演者:山村 亜希(人間・環境学研究科 准教授)

コメンテーター:佐野 宏(人間・環境学研究科 准教授)

森成 隆夫(人間・環境学研究科 教授)

セッション2:賀茂の流れと社叢林の植物学

講演者:瀬戸口 浩彰(人間・環境学研究科 教授)

コメンテーター:宮下 英明(人間・環境学研究科 教授)

中嶋 節子(人間・環境学研究科 教授)

定例行事

人間・環境学フォーラム

様々な研究領域を抱える当研究科では、「専門分野を超えた研究交流のための環境作り」、及び「研究成果の公表と外部への情報発信」を目的として、年に2回、講演会や懇親会を開催しております。

第39回人間・環境学フォーラム

日時:平成30年4月6日(金)

司会:吉田 鉄平(関連環境学専攻 物質関連論講座 教授)

第一部 15:30~17:30 新入生歓迎講演会・交流会(人間・環境学研究科棟 地階大講義室)

・15:30~15:40 研究科長挨拶

・15:40~16:20 新入生歓迎講演会

「地球の中の貴金属 ~その「貴」なる所以~」

小木曾 哲(関連環境専攻 自然環境動態論講座 教授)

・16:25~17:30 交流会

「大学院生活の過ごし方 ——ストレスと上手につきあうには?——」

和田 竜太(京都大学学生総合支援センター カウンセリングルーム 講師)

第二部 19:00~20:30 懇親会(吉田生協食堂1階)

第40回人間・環境学フォーラム

「人環&総人 秋の大交流会 ——隣は何をする人ぞ——」

日時:平成30年10月25日(木)

会場:生協吉田食堂1F

第一部 17:00~18:30 交流会「他/多分野を知ろう!」

学生の皆さんが日頃感じている学問上や進路上的の様々な疑問・質問に総人・人環所属の教員・院生が答えます。

第二部 18:30~20:00 懇親会



国際交流

人間と環境の関わりに関する諸問題を国際的な視点から追究することを目指している本研究科では、研究及び教育の両面において、国際交流が重要な基盤となっています。

●研究者の交流

毎年多数の外国人研究員（客員教授・准教授）、招聘外国人学者、外国人共同研究者などが本研究科を訪れ、研究活動、学会参加、学生指導などを通して目覚ましい貢献をしています（表1）。また本研究科からも毎年多数の研究者が、学会参加や共同研究のため海外に出掛けています。

表1 外国人研究者等の受入れ数

年度	2014	2015	2016	2017	2018
外国人研究者 (客員教授・准教授)	5	5	5	6	4
招聘外国人学者	7	3	1	8	3
外国人共同研究者	1	3	2	4	10

●外国人留学生

本研究科では、2017年5月1日現在、146人の留学生が在籍し、その出身地は世界23ヶ国/地域に及んでいます（表2・表3）。

表2 留学生受入れ数 (各年度5月1日現在)

年度	2014	2015	2016	2017	2018
留学生数	99	119	145	146	163

注) ビザが「留学」の修士課程、博士後期課程、研究生、特別研究学生

表3 留学生出身地 (2018年5月1日現在)

中国 (126)、台湾 (8)、韓国 (7)、米国 (5)、ロシア (3)、ニュージーランド (2)、(以下各1) イタリア、ウクライナ、英国、カナダ、シンガポール、トルコ、ハンガリー、ブラジル、ベトナム、モンゴル、ラトビア、ルーマニア
--

<留学生オリエンテーション>

新学期の初めに当たり、主に新入の留学生を対象にしたオリエンテーション、及び在学中の留学生、日本人学生を交えた懇親会を実施しています。



(2018年4月12日(木))

<留学生見学旅行>

本研究科では、毎年秋に一泊二日の留学生見学旅行を実施しています。2018年の旅行先は、和倉および金沢方面でした（写真は兼六園と千里浜なぎさドライブウェイにて）。



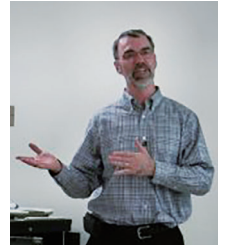
(2018年11月22日(木・休講日)～23日(金・祝日))

●国際交流セミナー

研究科では、常時1名ないし2名の外国人研究員（客員教授・准教授）が研究に携わっています。研究科として先生方を歓迎し、また先生方には各自の研究成果を研究科に紹介して頂くため、先生方のご講演と懇親会で構成された「国際交流セミナー」を開催しています。

演題が英文のものは英語でご講演が行われました。

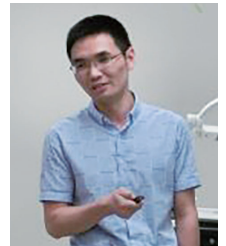
第67回 2018年4月20日(金)
レスター・ロシュキー先生
(米国・カンザス州立大学教授)
演題: How is a movie viewers' understanding related to how they watch a movie?



第68回 2018年5月10日(木)
謝峰(Xie Feng)先生
(中国・中国科学院大学 成都生物研究所教授)
演題: Biodiversity and Threatened Status of Amphibians in China



第69回 2018年8月2日(木)
劉剛(Gang Liu)先生
(中国・西南石油大学教授)
演題: Chinese culture and lifestyle: a brief introduction of the life in Wuhan



第70回 2019年1月15日(火)
アリ・クレイボ先生
(エルサレム・アル=クドゥス大学教授/アーティスト)
演題: Jerusalem in Kyoto — Similarities and Differences between Two Ancient Cities —



第71回 2019年2月15日(金)
アルベルト・ピアンコ先生
(フランス・細胞分子生物学研究所主任研究員)
演題: A Cultural Journey between Italy and France



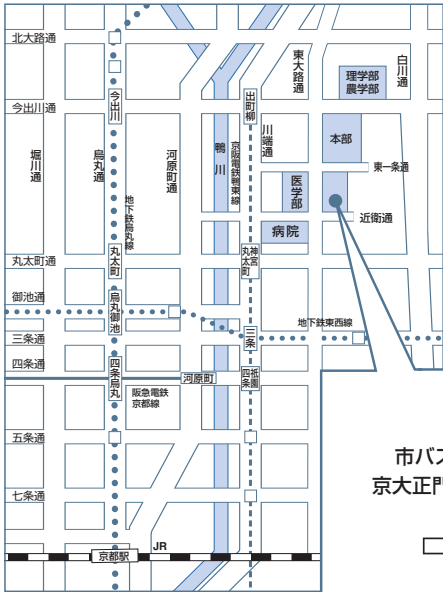
京都大学大学院人間・環境学研究科/総合人間学部
国際交流推進後援会
2005(平成17)年1月1日付けで、「京都大学大学院人間・環境学研究科/総合人間学部国際交流推進後援会」が設立され、本研究科における国際交流が一層活発になりました。

近辺地図・構内図

交通

タクシー：JR京都駅から約30分

市バス：230円



交通機関：乗車地	系統	経由・行き先	下車地
J R：京都駅前	D-2乗り場から206系統	東山通 北大路バスターミナル	京大 正門前
阪 急：四条河原町	201系統	祇園・百万遍	
	31系統	東山通 高野・岩倉	
地下鉄：烏丸今出川 京 阪：出町柳駅前 (2番出口加茂大橋東詰停留所)	201系統	百万遍・祇園	



